# 課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

| | |
|---|---|
| 学　籍　番　号 | 09DC1601（中国研究科中国研究専攻） |
| 氏　　名（本籍） | 邢　朝国（中国） |
| 学 位 の 種 類 | 博士（中国研究） |
| 報　告　番　号 | 甲　第　95　号 |
| 学位授与年月日 | 平成 29 年 3 月 20 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |

論　文　題　目　　私房钱：家庭里的隐性财产、权力与亲密关系

| | | |
|---|---|---|
| 審　査　委　員 | 主査　教　授　周　星 | |
| | 副査　教　授　松岡　正子 | |
| | 副査　教　授　唐　燕霞 | |

2017 年（平成 29 年）2 月 14 日
愛知大学大学院中国研究科

# 審査結果要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、邢朝国氏より提出された課程博士の学位授与申請書、申請論文および関連参考論文等関係資料に対し、2016年11月29日午後、愛知大学車道校舎で予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めに従い、以下の２項について、審査委員が意見を交換し、慎重な審査を経て、全員一致で次の結論に至った。

（１） 申請者の履歴事項、研究歴、研究業績について、十分に評価できる。

（２） 外国語についての試問は不要である。

予備審査の結果として、博士学位申請論文は基本的な要件を満たしており、学位授与申請の受理を「可」とし、本審査への移行を「可」とする。

2017年1月19日午前9時30分 - 11時00分まで、中国研究科に承認された本審査委員会は邢朝国氏より提出された学位申請論文に対し、口頭試問という形で本審査を行った。本審査は遠距離TV設備を使って、愛知大学車道校舎K1002教室と北京・中国人民大学にある愛知大学ＩＣＣＳ分拠点の会議室をつなぎ、順調に行われた。

まず、邢朝国氏より学位論文の主旨、先行研究、理論の枠組みと方法論、キーワード、調査対象になった地域と村落の概況、フィールドワークのプロセス・収穫及び一次資料の信憑性、本論文の構成、本研究の斬新性、結論の要点や問題点などについて、詳細な説明や陳述がなされた。

次に、各審査委員より、質問やコメントを行い、口頭試問や質疑応答を行った。すべての質問に対して、回答がなされた。それらの回答に対し、審査委員全員は概ね納得できるレベルに至ったという共通認識を共有した。

口頭試問や質疑応答が終わって、邢朝国氏が退席した後、引き続き審査委員会は議論を重ねて、以下の決議案を纏めるに至った。

邢朝国氏の博士学位申請論文は、『私房銭：家庭里的権力、親密関係与隠性財産』（Private Savings: Power, Intimate Relationship and Hidden Property）を題とし、中国安徽省のある漢民族の村落をフィールドとして、綿密な聞き取り調査を通して得られた一次資料に基づいて、現代中国の農村社会における「私房銭」、すなわち「へそくり」の実態やその存在の有り方を社会人類学の視点より、研究し明らかにしたものである。本論文は「へそくり」を巡る諸問題を切り口とし、財産の管理や消費の単位としての中国農民の家庭の特性を明らかにしたうえで、農民の家庭の生計構造およびその論理を踏まえて、農民の家庭内における個人の欲望、自由と家庭全体の利益との間の緊張関係や整合性及びそのメカニズムを解明し、現代中国における農村家庭の変遷プロセスに関する学術的議論にも答えて、独自な持論を展開したものとも言える。

邢朝国論文のメリットとして、以下の幾つかがあげられる。

一つ目は先行研究について、家庭研究のパラダイム転換、家庭の財産と言った二つの側面から整理し、本論文の理論的な視角、すなわち「家庭の視角」、「個人の視角」及び「性別の視角（ジェンダー）」についてそれぞれ明白な説明がなされた。

二つ目は、複数回にわたって故郷の村でフィールドワークをまじめに実施し、そのメリットとデメリットの両方をはっきり意識した上で、綿密な現地調査を行った。参与観察と聞き取りを通して、村人のプライベートとも言える「へそくり」について、大変貴重な資料を得られた。調査対象との間に、かつての「絆」を生かし、研究者として研究対象との距離感を維持しながらも、信頼関係を築きあげられたゆえ、集められた資料は信憑性の高いものと言える。「よそ」と「地元」の視点を両方兼ね備えることは、今回のフィールドワークの特徴と位置づけられる。

三つ目は、「へそくり」に絞って展開された本論文の研究は、「へそくり」の類型、「へそくり」を貯める動機、「へそくり」の生じた因果関係とメカニズム、「へそくり」に関する村人の道徳体験などを深く論述したものである。特に、「へそくり」を貯める動機、秘密とされる程度の差、および「へそくり」の用途から、「へそくり」の分類を試みた。動機によって、「へそくり」を利他（家）型と利己型に分けるが、秘密とされる程度の差によって、暗黙の了解、すなわち家族の構成員に知られている「へそくり」と全く「秘密」の「へそくり」に分けられる。用途からも、生き残るための「へそくり」と贅沢や享楽のための「へそくり」に分けられるころなど、「へそくり」の現状と実態は実に多様的で、様々な有り方があると鋭く指摘し、「へそくり」に関する世間の固定イメージを大幅に覆したと言える。

四つ目は、以上のような分析を踏まえて、独自の理論的展開や解釈を行い、論理的な説明がよくなされた。例えば、「へそくり」作りの動機をリスクに備えるためのパターンと個人の生活自由のためのパターンの二つにまとめ上げた。前者は婚姻のリスク、生計のリスク、養老のリスクなどがあり、後者は個人の自由をある程度保障するためである。さらには、フィールドから得られた資料に基づいて、特別な動機として個人の遊びである賭博と親孝行に基づいた両親への手当が取り上げられた。賭博を巡って、家庭と個人との間に存在している緊張関係を深く論じており、また、両親への手当としての「へそくり」についても、夫と妻にとってそれぞれ意味の違いを分析し、特に女性の実家への援助・手当などは、夫や姑の監視下に置かれることも指摘したのである。

家庭の基礎になる婚姻関係の安定性や家庭内の経済管理の厳しさによって、「へそくり」行為の発生の有無が因果論的に解釈され、即ち、婚姻関係の安定性が高ければ、「へそくり」発生の可能性が低い、その安定性が低ければ、「へそくり」発生の可能性が高いと論じた。また、家庭内の経済管理が厳しければ、個人の自主性が損なわれ、「へそくり」作りの可能性が高くなる傾向性が存在する。重要なのは、以上のメカニズムは互いに相互作用的な関係にあることである。さらに、農民の家庭内の経済生活や生計管理のモデルを整理し、夫婦両者による管理型、妻主導型、夫主導型、夫婦別々型に細分化し、中国農村の家庭内の権力関係の有り方及び親密関係との関係性等を理論的に纏めたのである。

「へそくり」はどこまで納得され得るか、村人の「へそくり」に対する態度と見方も明らかにされた。「家庭/個人」という関係の枠組みの中で、「へそくり」の妥当性が判断されるが、特に「へそくり」への道徳上の評価は「道徳相対主義」であるという指摘は意味深い。どのような場合、状況によって「へそくり」が納得され得るか、また、理解され得るかなどについても、具体的に整理された。

最後に、「観念家庭」＝観念としての家庭と「実践家庭」＝実践としての家庭という分析の対概念が打ち出された。前者は、理想とされる家庭、または、言説による家庭の有るべき姿や形であり、それは家庭に対する想像やアイデンティティの方向性を統合したものであるのに対し、後者は、家庭が構成員の一連の断片的な行動から形成され、「へそくり」はそれらの行動の中に位置づけられる。家庭生活における構成員個人の「実践」は、家庭の統合を強化する場合もあれば、それを弱体化させる場合も有りうる。「へそくり」という身近な事実や現象を社会人類学的研究によって、家庭の内部構造やそのメカニズムの解明への重要なカギと位置づけたことは高く評価される。

本論文の修正すべき点として幾つか指摘される。

一つ目は、調査対象の村の全体像がはっきり見えてこないこととインフォーマントの基礎データが明記されていないことである。

二つ目は、社会の変遷による「へそくり」の変化があまり考慮されていないことである。

以上をもって、本審査委員会は全員一致で、邢朝国氏論文が愛知大学博士号の要件を満たしていることを認め、口頭試問を「合格」とする。